

# JSQCニュース 1994年12月 No.177

発行 社団法人 日本品質管理学会 東京都渋谷区千駄ヶ谷5の10の11 (財)日本科学技術連盟内 電話 (03)5379-1294

## 品質工学フォーラムの最近の活動

(財)日本規格協会 出版部 澤田 位

### 1.はじめに

品質工学は、"製品"が市場に出荷された後、使用中に問題を起こさないようにするために、設計をすればよいかを研究している。製品が出荷された後で、メーカーが顧客と一緒にになって製品品質問題を確認しているようでは遅すぎる。開発段階で、市場における結果を予測し、問題が起きないように事前に対応しておくための開発設計の具体的な方法論を議論しているのが品質工学である。

現在品質工学では、"先行性"と"汎用性"と"再現性"ということがポイントとなった議論が展開されている。これらのポイントを踏まえた検討の中心的テーマとなっているのが、"システムの機能性評価"であり"基本機能問題"である。品質工学に関する最新の議論は『品質工学』誌をみていただくこととして、以下に、先頃開催されたフォーラムの記者会見での発表をもとに、フォーラムの概要と近況を報告する。

### 2.フォーラムの近況

1994年11月30日、東京の都市センターにおいて、品質工学フォーラムの最近の活動状況が、産業経済紙並びに関連雑誌のジャーナリストを集めた記者会見の場で発表された。

品質工学フォーラムは、昨年1993年3

月、技術者を主体とする約900名の会員をもって通常の学会と同等の内容を備えて設立されたものである。本フォーラムの初代会長には、品質工学の創始者である田口玄一博士が選出された。事務局は、当面日本規格協会内 (TEL03-3583-8008, FAX03-3582-0698) におかれている。

現在では会員も1,300名に増加し、全国各地には会員の自主的な運営による研究会が続々と設立されている。会員は、すべてが年会費8,000円を拠出する個人会員によって構成され、毎年6月に開催される研究発表大会への参加や隔月で発刊されている機関誌への投稿や講読などを通じて品質工学の開発現場への適用に励んでいる。

本年10月には、ニューヨーク州ロchesterにおいて、本フォーラムの北米版ともいえる"北アメリカ品質工学フォーラム"が設立された。これは、元来、有用と判断されたものは大胆に導入を図るアメリカの風土のもとで、品質工学の普及に大きな弾みとなるものと思われる。

### 3.基礎研究への投資について

記者発表の席であいさつに立った田口玄一会長は、アメリカの製造業での品質工学の普及と活用状況を紹介しつつ、日本の経営者のありように触れて、「日本で

は、依然として開発する商品のコンセプトに基づく製品開発が行われているが、フォード社やコダック社などアメリカの製造業では、製品化を直接の目標とするこうした開発はほとんどやられてはおらず、基礎研究段階での品質工学の適用が積極的に進められている。

「もともとアメリカでは、基礎研究が盛んであり、幾多のシーズを開発して来た実績もある。アメリカの経営者は、従来からこうした基礎研究に多額の投資をしてきた。日本の経営者も、基礎研究に対する投資を怠っていると、日本は製品競争の場面でもアメリカに負けてしまう。」と警鐘を鳴らした。

一般に、アメリカの経営者は株主との対応において、短期的な見通しの中で経営を行う傾向があり、これに対し日本の経営者は、長中期計画の観点で将来を見通した経営を行なうといわれている。しかし、田口会長の報告を伺っていると、こうした見方は極めて一面的な見方にすぎないのではないかと思えてならない。

特に我が国の製造業においては、貿易摩擦問題を見るまでもなく、従来のような欧米からのシーズや技術の提供をうけることが難しくなって来ている現状を率直に認めざるをえないのが現実である。またこうした現実は、将来的に、我が国の製造業が製造すべき製品は徐々に減っていくことを意味している。日本の経営者は、今からでも基礎研究に積極的な投資を行うべきだということを思い知らされた記者会見であった。

### 私の提言

#### 支部活動の活性化

株式会社竹中工務店

取締役 企画本部長 原 香

本年10月國らずも関西支部の大役を仰せつかりました。支部発足4年目に当たり、軌道に乗り始めた時期であり、責任の重さをひしひしと感じています。

去る10月22日に本年度の日本品質管理学会の年次大会を当地関西大学で開催していただきました。私の任期での初の大行事であり、準備に当たっては支部の多くの方々と綿密な打合せを重ね、無事開催することが出来ました。

参加人数も予想を越えて多く、各会場共ほぼ均等に参加して頂けました。夜の懇親会も大盛況で、和やかなうちに盛り上った良い会がありました。この成功は本部と支部の関係者の皆さんのご苦労の賜であり、開催地の支部長として感謝に堪えません。

学会の支部活動に初めて携わり支部活動の難しさを改めて実感しております。

その第1は学会運営の母体となる事務局が存在しないことです。支部運営が日本科技連、規格協会のご好意に依存しております。学会活動そのものがボランティアであることは当然としても、運営の事務局が存在しないことに先ず驚かされた次第です。

次に、支部に課せられた使命役割は一体何であるかということです。本部の活動の何かを分担するのであれば、本部の指示に基づき、意見交換がなされるのであろうと思います。また、支部独自の活動が狙いであれば魅力的な支部活動が必要であり、支部活動への会員の積極的な参加の期待出来る企画が大切であると考えます。研究会・見学会等も会員自身にとってメリットがあり、会員の学会活動が具体的な成果となってフィードバックされなくてはならないはずです。

さらに、当学会は学界の会員数が10%強しかないことです。一般的の学会であれば、学会活動の中心は学界の先生方が担って下さいます。これが関西支部となりますと先生方の数も少なく、企業の会員数も少なく、特定の方に負担が掛ってしまいます。このことから当分の間、本部の学界の先生方の積極的支援をお願いしたいと思います。

支部長としての今後の役割は支部活動を活性化させるために、将来を担う若い人達が積極的に学会活動に参加出来るように、各種の支部行事を充実させ、魅力ある学会活動とすることが重要と考えています。学会活動の本当の力は本部あっての支部ではなく、支部あっての本部となるように日本全国に支部設置が提案されるような関西支部にならねばならないと思います。皆様のご協力をお願い致します。



## JSQCメーリング・リスト開設

東京大学工学部 兼子 敏

情報ハイウェイやインターネットなど、情報ネットワークに関する話題が連日新聞や雑誌などを賑わせています。このような情報ネットワークが有用なものであるなら、学会としても積極的に活用していくことが望れます。

すでに10月の年次大会の懇親会でも紹介されました。研究開発委員会の権委員長(慶應義塾大学)と兼子委員(東京大学)が中心となって、品質管理学会のメーリング・リストを開設し、運用を開始しています。メーリング・リストとは、電子メールを利用した特定多数の人々を結ぶコミュニケーション・ネットワークのことです。動作原理はいたって単純で、ある特定のアドレスに電子メールを発送すると、登録されたメンバー全員にそのメールが配信される、というものです。これによって、特定のメンバーだけが見ることができる電子的な掲示板のような

機能を果たすことができるわけです。

JSQCメーリング・リストには、平成6年12月13日現在、38名が登録されています。今までに、PC上で動作する統計パッケージに関する質問や、ISO 9000シリーズの審査登録に関する質疑、T C 69の活動状況報告などがメーリング・リスト上で交わされています。

現在は、「どのような使いができるのか」を試行している段階です。参加・登録にかかる費用は一切ありませんので、ぜひ会員の皆様の積極的な参加をお願いします。

### —参加申込方法—

氏名、所属、電子メールアドレス、及び(できれば)簡単な自己紹介を含む電子メールを、

[jsqc@tansei.cc.u-tokyo.ac.jp](mailto:jsqc@tansei.cc.u-tokyo.ac.jp)

まで送ってください。数日中にメンバー登録いたします。

### —メッセージの発信方法—

品質管理や統計手法などに関する質問や、それらにまつわる話題など、気軽にメッセージを発信してください。上記のアドレスあてにメッセージをメールしていただければ、自動的に登録メンバー全員に配られます。

このメーリング・リストには、インターネットの電子メールアドレスを持っている方はもちろん、商用BBS(いわゆるパソコン通信)に加入されている方でも、インターネットと電子メールのやり取りができる方ならどなたでも参加可能です。会員の皆様の積極的な参加をお待ちしております。

